

---

# 二秒で恋して。

文樹妃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二秒で恋して。

### 【Nコード】

N6651E

### 【作者名】

文樹妃

### 【あらすじ】

いつもミスばかりする、出来の悪い後輩　ただそれだけの存在だった彼が、突然豹変したあの夜、私は恋に落ちたんだ。たった二秒、それだけで私を虜にした男に、今夜もまた囚われていく。

夜が来たら、彼は変わる。

正確に言えば、その眼鏡を外した瞬間に。

まるで二重人格かと思うくらい、全く別人になっちゃった。

あの彼がこんな目つきをするなんて、想像すらできなかった。

その目に恋したんだ。まさにノックアウト。

そう、たったの二秒で、私は彼の虜になった。

「ミズキさ〜ん、これ、チエックお願いします」

落ちてきた髪を後ろでまとめたおしていた私に声をかけたのは、  
情けない笑いを浮かべた後輩だ。

渡された書類に目を落とした後、私はそのまま無言でつき返した。

「あれっ、なんかおかしかったですか？」

へらり、と笑ったまま、困った顔をする男を、苛立ちを隠さずに  
睨みつける。

「ここと、ここに誤字。それから、こっちにも。こんな単純なミス、  
一体いつまでしてるつもり？」

冷たい声にも、彼はめげない。笑顔を崩さずに、頭を掻いたりな  
んかしてる。

「あれ〜おかしいな。ちゃんと見直したはずなのにな〜……すぐ直  
してきま〜す」

「小学生じゃないんだから。しっかりしてよね！」

思わず大きくなった声に、周囲の視線が集まるのがわかる。

「また怒られてるよ、国立くん」

「でも全然応えてないよね、あの笑顔」

くすくす笑い合う事務の女の子たちに、平気な顔で笑いかけたり

して。

「ちょっと、話を聞いているの？ 大体、やる気があればもう少しミスも防げるってもんでしよう。それが - 」  
人差し指を突きつけて、説教を始めようとした私に顔を近づけてにっこり。

「あ、眉間に皺しわ」

そう言われて思わず眉間を押さえてしまっただけから、しまった、と思う。

最近怒るとできるこの皺に、ヤツはすっかり気づいてたんだ。

眼鏡の奥のヤツの瞳が、少しだけ意地悪な光を垣間見せたのは、私しか知らない。

平気な顔でデスクに戻って、書類の修正を始めた彼を睨んでから、私は大きいため息をついた。

いや、つくふりをした。

そんな私を見ながら周囲は苦笑している。きっと思ってるはずだ。  
国立くにたち 一真かずまと斉藤 ミズキは単なる会社の後輩と先輩。

そう、誰も知らないんだ。いつも説教する側とされる側。そんな私たちが、実は付き合っている、だなんて。

「ミズキさん、まだ寝ないの〜？」

いきなり扉を開けられて、私は思わず手にしてた美容クリームを落とすようになった。

あわてて隠そうとした手を、素早い動きで掴まれる。にやり、と笑った一真に、思わず口を開く。

「こっ、これは別に、気にしてるとかじゃないからね！ ただちょっとお手入れというか、だからそのっ、恵利にもらったから使ってみようと思って……」

赤地に金のロゴが入ったそれが、皺予防の高級美容クリームだなんて、まさか一真が知ってるはずはない。

きつと知らないはず、そう思いながらもあわてる私に、一真は眼鏡を軽く押し上げて笑った。

「ふ〜ん……三十路だと色々気を遣うんだね。まあ、頑張ってる」

どうでもよさげな口調に、私は余計に真っ赤になった。

「ちよつと！ まだ二十九だってば！」

閉まったバスルームの扉の向こうで、一真の押し殺したような笑い声が聞こえた。

ちよつと年下だと思って。それでも、私と五つしか変わらないくせに！

無意識に力が入って出てきていた乳白色のクリームを、念入りに眉間にすりこんでから、私は憤慨してリビングへ向かう。

必要最小限の家具しか置いてない一真の部屋。

さっきまでテレビがどうでもいい深夜番組を流していたその空間で、一真はソファに座っていた。

間接照明に照らされて、ワイングラスなんか片手にしている横顔は、さっきまでの飄々とした笑顔とは違う。

意外と夜景が綺麗な窓ガラスの向こうを、静かに眺めている一真の瞳。

まだ眼鏡の奥に収まっているというのに、切れ長の瞳がこちらを向いた途端、思わず胸が高鳴る。

「ね、寝ないの？」

なんでこんなにあせってしまうんだろう。

こうして二人で過ごすのも、気づけばもう三ヶ月を越した。彼の部屋で朝を迎えたことも、数え切れないほどあるというのに。

私の問いに、飲み干したグラスを静かに置いた一真は振り返る。

「寝るよ」

たった一言。それだけなのに、私はその場から動けなくなった。彼の眼鏡が、軽い音をたててテーブルに置かれる。そして見上げられた瞬間に、私はまた囚われた。

「おいで、ミズキ」

少し微笑んで伸ばされた大きな手を、戸惑いながら取る。

そしていざなわれるのは、彼の寝室。

昼間とまるで逆転したかのように、彼は余裕たっぷり、私はそんな瞳に逆らえなくなる。

二秒で恋した、その瞳に。

ブラインドの隙間から覗く月明かりに、時々照らされる彼の顔。いつものへらへらした笑顔が嘘みたいに真剣で、整った造作をしてる。

眼鏡を外した途端、存在を主張する瞳。昼間は優しいその色が、なんだか綺麗過ぎて冷たくさえ見える。

でも時折こうして熱を込めた視線が下りてきて、囁いてくれる。

「ミズキ……」

吐息と、愛しげな口付けと共に、何度も何度も名前を呼ばれて、まるで頭の奥がしびれたように、何も考えられなくなっていく。

細身なのにしっかりと筋肉がついたその肩に、思わず爪をたてる。

それを合図のように、捕らえられたのは唇。

こうして彼の深みにはまっていくんだ。年下だとか、後輩だとか、そんなことも全部忘れて、彼に恋するただのオンナになる。

また名前を呼ばれながら、私は思い出していた。

初めて呼び捨てにされた、あの夜のことを。

会社を出たら、いきなりの土砂降りだった。

まさかあの国立と二人で残業だなんて、ついてない。

そんな気分でやっと終えた残業の後が、またこれだなんて。

傘を持っていてもずぶぬれになりそうなひどい雨に、途方にくれていた私の横で、彼は笑ったのだ。

「こりゃあ、もうあきらめるしかないですね」

その妙に明るい声がどういう意図で発されたのか、疑問のまま見上げた私の手を、いきなり強い力で引っ張った彼。

問答無用に雨の中に飛び出す形になって、そのまま走り続ける。

ただパニックで、抗議の声もあげられずにひたすら走った。

そして止まったのは、どこかのマンションの前。

「ここ、俺ん家なんです」

そう言われて目を丸くする私を楽しげに見て、またも手を引っ張っていく。

エレベーターに乗せられてから、我に帰ってその手を振り払ったら、にやにやと笑う彼。

「いいんですか？ すっごいセクシーなことになってますけど」

そう指差されたのは、自分の白いブラウス。雨に濡れて張り付いて、下着が完全に透けていた。

急いで体を守るように腕を回した私を見つめてから、彼はすました顔でエレベーターのボタンを押して、閉めてしまったのだ。

雨が止むまで雨宿りしたらいい、とか、着替えを貸すから、とか、色々と並べられた言葉を信じた私が馬鹿だった。

まさか、いつも笑ってるだけの情けないただの後輩が、急に本性を現すなんて思ってもみなかったのだから。

七 一、と書かれたドアを開けて、案内された彼の部屋。

「どござ、どござ〜」

そんな気の抜けた声で通されて、そのまま後ろ手にドアを閉められて、振り向いた途端に彼は笑った。

「はい、お持ち帰り終了」

え、と見上げた私をにやりと見てから、彼はいつの間にか取り出したらしいタオルで自分の髪を拭いている。

「ちよつと、それどういう」

意味、と続けようとした私は、急に距離を縮められて身構える。

「ミズキさんって、思ったよりガード甘いんだね」

そう言った彼の眼鏡についた水滴が、静かに流れていく。彼の言葉を理解してから、ようやく踵を返した私の腕を、意外な力で引きとめた後、またも意味深な視線が降ってくる。

「こんなに簡単に男の部屋についてきちゃ、だめだよ。危ないって、全然考えなかった？」

両腕を捕まえられて、今までにないくらい顔を近づけられて、私は悔しさを抑え切れなかった。

「だっ、だって、あなたが着替えを貸すだけだって　それに、まさかあなたが」

動揺でうまく言葉にできない続きをお見通しかのように、目の前の顔が笑う。

「まさか俺なんかが、こんなことするなんて思わなかった。ってこと？」

その瞳は、いつもの情けないものとはまるで違っていて、思わず言葉を失った。

そんな私をしばらく見つめた後、彼は苦笑しながら新しいタオルを渡したのだ。

そのままりビングのソファに腰掛けて、まだ濡れた髪をかきあげて、軽く一息。

呆然と立ち尽くしたままの私を見上げて、言う。

「帰りたいなら、帰ってもいいよ。どうぞご自由に」

そのあまりに勝手に傲慢な口ぶりに、目を剥いた私の前で、彼は



笑顔が消した。

「だけど 残るなら、後悔はさせない。ずっと待ってたんだ、この瞬間を」

人が変わったかのような真剣な声とその瞳に、私は目を奪われた。そして私が見つめる先で、彼はそつと眼鏡を外したのだ。

「おいで、ミズキ」  
レンズに邪魔されずに初めて見た彼の瞳と、突然大人の男になった彼の囁き。

このわずか二秒間で、私はいきなり囚われた。

恋に落ちる瞬間、って本当にあるんだと、他人事のように思った夜だった。

そして今日も私は、こうして怒鳴っている。

散々彼が凡ミスを繰り返すのが、わざとなのか、そうでないのかは、未だに謎だ。

でも立场上説教しないわけにはいかない。

それに二人のことを気づかれないためにも、私は厳しい先輩でいなきゃいけない。

決意を新たにまた説教を始める私に、一真は相変わらず情けない笑顔を返す。

それでも最近その眼鏡の奥で、彼の瞳がいたずらっぽく光る瞬間が、どうにも増えたような。

ふと言葉を止めた私に、一真は大きな声で「あれ〜？」と言った。わざとらしく私の少し立てたシャツの襟を覗いて、全員に聞こえるほどの声で言ったのだ。

「ミズキさん、悪い虫にでも刺されたんですか〜？ なんかすげー

赤くなってますよ」

言われてあわてて首筋を押さえた私に、ちょうど近くにいた女子社員たちが集まってくる。

隠そうとする私の手を何気に押さえて、大げさに検分する一真のせいで、皆の注目を浴びてしまった。

「あゝミズキさん、それってまさかキスマーク？」

「嘘、ミズキさんが？ お堅いと思ってたら、意外とやりますね〜」  
そんな声に囲まれて、止めようもなく頬が赤くなっていくのがわかる。

「ちっ、違っつてば！ これは虫に……」

あわてて弁解する私に、一真は平気な顔で笑った。

「近頃の虫は、ひどい刺し方をするもんですね〜これ、本当に見れば見るほどキスマークみたいだもん。気をつけたほうがいいですよ、ミズキさん？」

にっこりと害のない顔をして肩を叩いた一真に、私は頭の中で吼えていた。

この二重人格！ 誰がつけたか、言ってやろうか？

自分で思ってから、昨夜の彼を思い出してまた赤くなる。

いつか絶対立場を逆転してやる、と心の中で誓いつつも、勝負が難しいのはわかっていた。

だって、彼のあの瞳には、やっぱり勝てないんだもの。

ため息をもらしながらも、そんなのも悪くない、なんて思っ  
まっている。

だって今夜も、きっとまた恋に落ちるから。

(後書き)

このお話は、私のブログの2000ヒットを感謝して書いたものです。

タイトルに「二」が入っているのはそのためです。

「二」を入れたものを考えて、こういう話になりました。

この場をお借りして、ブログに遊びに来ていただいている皆様、いつもありがとうございます！

感謝SS、楽しんでいただけていたら幸いです。

まったりと、ただギャップのある眼鏡な彼と、彼に翻弄される年上の女を書いてみたかっただけなので、ストーリーはないに等しいです。

ちよつとオフィスラブ風味です。(笑)

感想等いただけたら嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6651e/>

---

二秒で恋して。

2010年10月8日12時11分発行